

---

# 千手岬の可憐花

鱈ぱんちょ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千手岬の可憐花

### 【著者】

Z7094Z

### 【作者名】

鮫。ぱんちょ

### 【あらすじ】

「みてじらんみてじらん 元気な茎が夕暮れに伸びた  
薔ができたら水をやり だいじにだいじに咲かせましょう

千手岬の丘の上 宵闇に咲く可憐花」

とあるわらべ歌に興味を持った折崎香は、その歌の元である岬である女の子と出会い…

(前書き)

はじめまして、鰐はんちゅと申します。小説載せるのは初です、処女作ですね。私は小説を書いて日がまだ浅いです、至らない点も大変あると思いますが、どうかご了承ください。

## Title・千手岬の可憐花

「みて、じらんみて、じらん 元気な茎が夕暮れに伸びた  
薔ができたら水をやり だいじにだいじに咲かせましょう  
千手岬の丘の上 育闇に咲く可憐花」

### 「育闇に咲く…か。」

そんなことを調べている私は織崎香オリザキカオリ、首都からは程遠い大学に通う1年生である。

選考は日本文化、夏休みの課題として地元に関する文化伝承のレポートを作成しているんだけど、なんとあと学校が後一週間で始まってしまうといつにこの課題を思い出、いま家のパソコンで、この町の歴史に関するものを漁つていたら、この歌が出てきた。私は何だかこの歌に興味を持ち、これを課題にしようと思つて調べていた最中だ。

「もう2時間もパソコンとにらめっこして、見つけた情報がこれだけ?」

今ある情報によると、この「千手岬の可憐花」のもとになつたところはここからほど近いところにあるらしい、ということと、今は「千手岬」ではなく「千住岬」に改名されている、といったところくらいか。作詞・作曲者の名前はあるか、出来た年もわからないなんて、さすがにやめそうになつた。

しかし、地元民である私はその「千住岬」なんものは知らなかつた。母や父に聞いても反応は一緒、実家のお祖母ちゃんに聞いても何も言わなかつた。誰も知らないものには探究心がわいてしまう私は役所に行って地図をもらつて来た、そして今、その千住岬の道に入つているともうんだけど…

「竹やぶの中の道か、小さく作られているから自転車がギリギリか、

道も細いし。」

なぜそこに行ひへ、と考えたのは翌日役所に行くと役所の人が千住岬についてなら現地に行つてそのにある歴史票を見たほうがわかりやすいとのこと、こちらの資料室には置いていないので、それ以外の方法だと県庁に行つてもうつしかないとのこと、私は夏にお金をたくさん使つたからいま県庁に行くお金さえも惜しい状態、しかも、夏の課題に田舎から県庁までの往復電車賃はざつと数千円はくだらない、使わないことができるならそんなお金は使いたくはなかつた。道を歩くたびジャリツ…ジャリツ…と小石がこする音がする、いい天気のためさつままで搔いていた汗はこの竹やぶから感じる冷気のせいか引いてしまつていて。竹やぶは長く続いていて、さつき来た道はともかく、この道の最後なんかつす暗くなっていることが私をすごく不安にさせた。

自然に目線が下の方を向いてしまい、脚も進む速度が早くなる…明りを感じたときにはもう出口についていた。

「わあっ…。」

その光景をみたとき思わず感嘆の声が漏れた、うす暗い影から見えてきたのは広い岩場とその先に見える青い海があつた。

私は今まで引いてきていた自転車を止め、岩場に足を運ぶ、そして波の潮風を体いっぱいに感じた。見える風景が違うとじりじりとした日光でさえ気にならなくなる。

ひとしきり波風に当たると、私は歴史票を探しに岩場を歩いて行つた、景色がいいので他の人も来てるかと思ひきや、誰もいなかつた。少し歩いたところに、そのものは少し海に出つ張つた岩場に設置されていた。

歴史票の内容を見ようと近づいていったが、歴史票は長い間潮風にやられていたせいか、文字のところが判別不能になるくらいの劣化具合だつた。

「はあ～あ、無駄足だつたか～。」

やり切れない感じが私の中を駆け巡り、私は近くの波打ち際の岩場

に腰掛け、脚をふらふらせた。

（県庁に行くしかないのかなあ、もつ時間もないし、あと一週間つて言つてもレポート作成には3日はほしい、仕方ない。明日にでも県庁に行かなきゃなあ。）

そんなことやこの歴史票についての文句や役所の怠慢に悪態をついているとき、ふと時計を見るともう短針が4から5に行こうとしているところだった。来た当時は風が無いとじりじりと暑かった日光が今はそこまで強くなく、風が吹くと少し肌寒く感じるくらいの気温になつていた。

（さて、帰ろう。もうすぐ11飯の時間だ。）

そうやつて立ち上がると後ろから声をかけられた。

「佳世ちゃん？」

「ふえっ！？」

知らない女の子の声が突如後ろから聞こえた、そのことに驚いた私は素つ頓狂な声をあげてしまつ、恥ずかしさをこらえながら声の主のほうに体を向ける。

声の主は私よりも少し背の低い一言で言つと控えめな感じの子だつた。控えめな化粧に派手な色を抑えた控えめなワンピース、髪の毛はまとめてお下げにしており、なんだかその控えめな格好と相まってはかなげな印象を持たせる子だつた。…まだちょっと恥ずかしかつたので一つ咳払いをして会話を開始する。

「私はその佳世ちゃんじやないよ。残念だつたね、ここで待ち合わせでもしていったの？」

「う、うん…まあそんな感じです。」

「ふーん、そう、じゃあ私もそろそろ帰るから、早くその佳世ちゃんが来るといいね。」

そうやつてそのこの横を通り過ぎようとしたとき、その子が言つた。「あの、あなたはどうしてここに来たんですか？」あまりにも突然の問いに驚きながらも簡単に答えた。

「ガッロの宿題、かな。ここにこらに伝わる歌を調べてるんだ。」

「歌つて言つのは、『はないちもんめ』とかのですか？」

「そう、でもわからないのがあって、ここに来れば見つかるかなーって思つてたんだけど、無駄足だつたみたい。これ、もう波風で読めなくなつちやつて、誰に聞いてもわからなーし、もうどうしようつて感じだよ。」

近くにある歴史票であつたものを口シ口シとたたく  
「こここの歌つてことは、『千手岬の可憐花』のことでしょうか？」  
思わぬ返答に思わず振り向く、その子に手を合わせ私は聞いた。  
「知つてゐるの？その歌のこと。」

「たくさんはしらなーですけど、大まかなことなら…」

「今それ調べてるの！良ければ教えてくれないかなー？」

「私の知つている範囲でよければ、いいですよ。」

「ありがとう、私、折崎香つて言つの、あなたは？」

「私は、妙です、大西妙つて言います。」

「そつか、妙ちゃん、この作品ができたときつてこいつくらいかわかる？」

「確か戦時中だつたかと思ひますよ？」

そんな風に何度も質問をしたり、間に雑談をはさんだりしていたので質問を終えるころにはもう5時の終わりくらいになつてしまつた。  
「ありがとう、これで学校の先生に怒られずにすむよ、妙ちゃんあ  
りがとう。」

「いえ、じつはひまつとじやべつてしまつて、聞いてくださいつて  
ありがとうございます。」

「あ、もうこんな時間だ、もう帰らないと、それじゃあね、」

「私はもう少し佳世けやんを待ちます、もうすぐ来るかもしれない  
ので。」

「そつか、じゃあまた今度ね。」

「今度？」

妙ちゃんはキヨトーンとした顔でこちらを見る

「そ、私ここに氣にいつちやつた、だからまたここで会えるかもねつ

てこと。」

「そりゃうと妙ちゃんはすうじく嬉しそうに笑つて  
「はいっ、また今度です。」  
と言つた。

その夜、私は実家に帰つていた、実家と言つても、車で20分ぐら  
いでついてしまつくらいの距離にあるのだが、で、なぜ私が実家に  
いるのかといふと、祖母が危篤だと連絡を受けたからだ。  
小さいころはほとんど祖母にくつつきっぱなしだった私はいわゆる  
おばあちゃんっ子で、実家でその光景を目の当たりにしたときには  
どうなつていいのかわからず、ただただ呆然としてしまつた。  
お祖母ちゃんのそばにはかかりつけのお医者さんがゆっくりとお祖  
母ちゃんを診ていて、実家人たちはあれやこれやとせわしなく動  
いていた。

「…うう」

突然のお祖母ちゃんの声、声を聞いてもう問題はないとばかりにお  
医者さんは聴診器を耳から外した。

「いや本当にすまないこととしたねえ」

先ほど口も聞けないくらいの原因不明の症状に見舞われていたお祖  
母ちゃんが布団の中から私に声をかける。今は実家の人も私の両親  
も部屋を数室隔てた居間でゆっくりとしているところだろう。

「まだ宿題終わつてないんだろう?」

「宿題じゃない、地方史のレポート」

おつとそうだつた、とおばあちゃんはくつくつと笑つた。

「で、終わりそうかい? 後そんなに時間もないんだろう?」

「うん、ここら辺の歌に詳しい人と知り合つたから、その人にある  
程度は聞いてる、後はレポートにそのことと自分の考察を入れるだ  
けでおわるわ、今日一日何もしなくてもそんなにからないから大

丈夫。」

「そうかい…じゃあ、安心だね。」

「でも驚いたなあ、お祖母ちゃんつてばいこの童歌も知らないんだもん。」

「知らないってわけじゃないんだけどねえ… そりだ、私の話をしてあげよう。」

私は「クリとうなずいた

「まだ私が若いころ、香くらいこの年頃の話を、私はちょっとしたことで一度家を飛び出したことがあってねえ、その時は家には一世代いるのが普通だった。だから友達の家に匿つてもうつるなんかも難しくてねえ、あてもなく一日中ぶらぶら町を歩いてたのや。」

いつたん言葉を切り、私が聞いているのを確認してからお祖母ちゃんは話を続ける。

「ずっと歩き続けてその内はずれにある岬についたのや、やいこま初めて来たんだ、なんせ、変なうわさがあつたからね。」

「変なうわさ？」私は聞き返していた。

「そーや、あそここの岬には夕方から夜にかけてある人物がいることがあるんだと、その人物は『変質者だ』とか『幽霊だ』って説もあつたがね。まあその岬に私はちょうどそのくらいに時間に訪れてしまつたんだよ。」

枕元に置いてあるコップの水を一口飲んでお祖母ちゃんは話を続ける  
「初めはあんまり信じてなかつたんだけど、人物は本当にいたんだ。でもそこで会つたのは同じ年ぐらいの女の子で、話もあつたから、私たちはすぐに友達になつた。それで、その日は結構遅くまで話込んでいたよ、話すことが無くなつたらじこらの童歌を歌を教えあつたりしてね。それから、いやなことや悲しいことがあつた時はその岬で覚えた歌を口ずさむよになつてねえ。なんだかその歌を歌うとその子が身近に感じられて、いやなことも共有している気持ちになつてね、もつと頑張ろうって思えるようになつたのさ。その後何度もかはその子に会いに岬に行つたりもしたけどね。」

ここでいつたん話を区切つて一つ息をつくお祖母ちゃん

「ある日ね、理由は忘れたけどまた岬に行つたのさ、その日はその子の触れてはいけなかつたような場所をつついでしまつたみたいで、その子はすごく激昂してしまつてね、取つ組み合いのけんかになつてしまつたんだ。その時にその子が脚を滑らせてしまつてね、岬のほうに落つこちてしまつたんだ。急いでそのほうを見たんだけど。どこにもその子の姿がなかつたんだ。私は自分のせいだと思つて怖くなつてそこから逃げちゃつてね。あとあと警察にも連絡したんだけど、数年たつてもとうとう見つからずじまいだね、それから歌はあまりうたわないので思い出さないようにしてたんだ、その子が教えてもらつた歌はね。」

「… そうなの。」

「その中に『千住岬に可憐花』があつてね、香にそのことを相談された時はそのことを思い出しちやつて… 何も言えなくなつちやつてごめんね。」

「そんなことがあつたのなら言いたくなくてもしょうがないよ…、課題も何とかなりそだから謝らなくともいいよ。」

「ありがとうね…。少し眠くなつたから眠るわ。おやすみ、香。」

「うん、おやすみ、お祖母ちゃん。」

そのあと私たち家族は家に帰り、遅い夕食をとつた。

次の日、私は信じられないことを父から聞かされた。お叔母ちゃんが殺されたのだそうだ。昨日はあんなにも元気な姿を私に見せてくれたのに、あんなお話も聞かせてくれたのに…。

昨日お祖母ちゃんの家に集まつていた親族の方たちが再度実家に集まつて何やら警官から殺人事件と思しき理由を聞かせてもらつた。まず後頭部が大きな衝撃でたたかれたような陥没と、口の中にたくさんの水、それも塩水が入つていたと聞かされた。警察は奇怪殺人として調べて行くことを言つて実家を後にした。私たちのそのあとは葬儀の場所や日時など、そんな話を私は何をすることもなく聞いていた。お祖母ちゃんとの思い出を一つ一つかみしめていると悲し

みに押しつぶされそうになつたので、親に先に家に帰るといつて実家を出て行つた。そして行くあてもなくぶらぶらした時だつた。

「やうだ、あの岬に行こつ…。」

ふいにあの岬からの光景を見たくなり、そのまま歩いて一時間くらいかけて、私はその岬についた。時刻はまだおひるを少し過ぎたくらいか。砂利を敷き詰めた道の竹やぶをじりり、じりりと音を立てて歩いていく。

竹やぶを抜けて見えた光景はこの前見たときよりも雄大に見えた。私はあの妙ちゃんと会えたあの読めない歴史票のある少し出っ張つたところで脚を投げ出してただただ海を見続けていた。

波が押し寄せ、岸壁にあたり、そのまま戻つて行く…そんな光景を何度見ただろうか…時刻はもう夕方になつていた。

「あ…もうこんな時間、帰らなきや…。」

そう思い、腰をうかせようとしたとき、私は体が動かないことに気が付いた。そして、背後から聞こえる楽しげな声

「ふふっ、香ちゃん、こんばんわ。」

そこには前回あつたときと雰囲気が少し違つた妙ちゃんがそこにいた。なぜか底抜けに嬉しそうな声をしていて、でもこの前の妙ちゃんとは根本から違うよう…控えめな妙ちゃんが今は別人のよう…いや、人じやないかのよう…見えた。それほどまでに今の妙ちゃんはおかしかつた。

「昨日ねー、とつても嬉しいことがあつたの、聞いてくれる?」  
ここから指一本も動かせない私は何もできずただ固まつていた。妙ちゃんはそんなことを気にせず言葉を続けた。

「昨日、やつと佳世ちゃんに会えたの…香ちゃんのおかげよ、ありがとう…。」

そんなこと私は知らない…。唯一動く首をひねつて妙ちゃんを見る。

「そんなの…私は知らない…。」

「ふふっ、とぼけちやつて、知らないはずが無いよね?佳世ちゃんだよ?折崎佳世。」

「えつ…、うそ…。」

私はその時息が止まりそうな感じになつた。その名前は知らないな  
ずがない。それはとつても大切で、とつても身近にいた人物…お祖  
母ちゃんを知らないなずがない。

「やっぱり知つてたんぢやない。その佳世ちゃんがやつと私のどこ  
ろに来てくれたんだよ。」

「つでも…お祖母ちゃんは昨日殺されて…」

「そうだね、殺されたねー。」

その時私は疑問がわいた。このことを血縁関係のない妙ちゃんが知  
つているのはおかしいと思つた。

「なん…で、知つてるの…？」

「ん? だつて、殺したの私だもん。」

その言葉の意味がわからない、頭がいつものように動かなかつたそ  
れでも何とかして言葉をつなげる。

「ど、どうして…？」

「私が佳世ちゃんに殺されたからよ。」

先ほどまでの明るい口調から急に低い声になる。表情は今までで  
体験した中で一番恨んでいることを思い出したかのように顔が大き  
く歪んでいた。

「佳世ちゃんは私をこの岬から突き落としたの、ちょっととした口げ  
んかになつただけで、その上ここから落ちた私を探そうともしなか  
つたわ！」

妙ちゃんが怒りで震える、そして見る見るうちに服がぬれてぼろぼ  
ろになつて行く。

「だから私は決めたの…あの女をこの手で同じ田にあわせてからこ  
こを去ろうつてね！」

次第に妙ちゃんの体にも変化が起る、おでこのあたりが赤黒く変  
色していくやうとへこみ、目や口からは赤い零がツツとこぼれる。

それはもう生きている人の容姿ではなかつた。

「ひつ…」

「私はあの女のせいで死んだの！まだ生きたかった！やりたいことがたくさんあつた！！」

妙ちゃんだったものは次第に怒りからこの世への未練を漏らしていだ、涙のかわりか、片方の眼球がでろりと頬をつたつて地面に落ちた。

「…つ…！」

あまりにもひどい光景に目をそらそうとしたが、首も動かせなくなつていて、その光景から目をそらすことができなかつた。妙ちゃんだつたものはズズ…ズズ…と血で真つ赤な脚を引きずるよつにして私に近づき、しゃがんで目線を合わせた

「それでね。私考えたんだ。」

悪靈…今の妙ちゃんの容姿を的確に表す言葉を私はこれしかもつていなかつた。そして、それを認識すると同時に自身の死の危険を感じた。

「う…っく、ふうつ…、ぐすつ…」

怖かつた、ただ怖かつた。ホラー番組とかあまり信じない私だが、今の私には目の前の彼女が怖くて怖くて仕方なかつた。

「私の将来を奪つた佳世ちゃんはもううん、私と同じ年くらいのあなたも殺そうつて。」

おかしな方向に曲がつた右手が私の頬をひんやりと撫でる。

「いや…いやつ！」

声を発したとき、突然体の自由を取り戻し、波打ち際から急いで離れる、が、すぐに尻もちをついてしまつた。

「だつてそうじゃない、あの女はあんなに長く生きて、私は十数歳で死んだのよ？不公平だからあなたも一緒に連れていくわ。これで平等でしょ？」

また楽しげに笑いながらおぼつかない足取りで私に迫つてくる。少し間をおいて彼女は口を開いた。

「だいじょうぶ、痛いのは初めだけだから…。」

翌日、千住岬に若い女性の死体が見つかったという。その死体は体を鈍器でぐちやぐちやにされたような死にざまで、所々から皮膚が剥け血が噴き出し、それはまるで千住岬に赤い花が咲いたようだつたといつ……。

(後書き)

いかがでしたでしょうか？ホラーはこの「千住岬の可憐花」がはじめてなので四苦八苦した作品です。次はファンタジーでも近いうちに書いてみようかかと考えています。こんな拙作に最後まで付き合つていただきどうもありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7094n/>

---

千手岬の可憐花

2010年10月11日08時04分発行